
月と少女と情報屋

緑瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

* まずはデュラララの小説第1巻を読むことをおすすめします。
読んでなくてもたぶん大丈夫ですが。

（前書き）

あらすじにも書きましたが、デュラララ小説第1巻を読んでからこの小説を読むことをおすすめします。
別にネタバレにはならないと思いますが・・・。

「そうか。じゃあ3人とも失恋がショックで、自殺したいんだね」とあるカラオケボックスの一室で、折原臨也は楽しげにいう。

ずっと前から続けているこの「趣味」。

自殺オフに集まってきた人間を観察して楽しむというものだ。

臨也としてはその人間が自殺する瞬間も見たいのだが、今まで自殺してくれた人は1人もいない。それが臨也は残念でならなかった。

今日自殺しに来たのは3人。

3人とも女子高生のようだ。

1人は大島菜々おおしまなな。

もう1人は由井裕美よしゆみ。

もう1人は……えーと……。

「君、名前なんていうんだっけ？」

臨也は少女に問いかける。

彼女にだけ名前を聞いていなかった。

すると少女は臨也の方も見ずに、ボソツと喋った。

「……夏目神奈なつめかなです……」

「神奈ちゃんか。いい名前だね」

この時、臨也には引っ掛かることがあった。

『神奈』

それはどこかで聞いたことがある名前だった。

でもどうしても思い出せなくて、臨也は考えることを放棄した。この時思い出していれば、神奈という少女を警戒することができたのに。

「奈倉さんはどうして死にたいんですか？」

裕美という少女が臨也に問いかけてきた。

奈倉というのは臨也の偽名だ。

そろそろばらしてもいいか。ああ、この子たちはどんな反応をするのだろうか？楽しみだ。

そして臨也は少女たちに残酷な真実を突きつけた。

「どうして死にたいか以前に、俺は全く死ぬ気はないから」

その場の空気が一瞬凍りついた。

次の瞬間、葉々が臨也を殴りつけた。

「・・・サイッテー。あたしは本気で死ぬ気で来たのに」

「私も、皆、で死ぬために来たのに・・・」

裕美も声に怒りをにじませて呟いた。

臨也は顔をうつむけながら、ほくそ笑んだ。

ああ、そうか。この人たちも『死』についてあまり考えてないな。と臨也は思った。

なら、もっと『死』について考えてもらおう。

「あのさあ、死にたいなら勝手に死ねばいいじゃん。どうして死に同行者を求めるの？死んだら後は何も・・・」

臨也は急に息が苦しくなった。
呼吸が上手くできない。

朦朧としていく意識の中で、菜々と裕美も苦しんでいる姿が見えた。

これは、毒？

臨也はボーっとしていく頭で必死に考えた。

毒はどこに仕込まれていたんだ？

ドリンク？そんなはずはない。だって俺からドリンクを回したから。
睡眠薬入りのを。

もちろん俺は口をつけていない。

じゃあ、どこに？

・・・だれが？

「・・・臨也さんですよね？」

急に自分の本名を呼ばれて驚いた。ここにいる3人には奈倉という
偽名で通していたのに。

臨也と呼んだその少女は

『神奈』だった。

臨也はいろいろ神奈に聞きたいことがあったが、声が出せなかった
ので、携帯電話に文字を打って神奈に差し出した。

『神奈ちゃん。君が毒を仕込んだの？あとなんで俺の本名を知って
るの？』

「はい、私が毒を仕込んだ・・・というか、細くて小さな針で貴方
たちを刺したんです。足元に針を刺しました」

少女の言ったとおりだった。足元に意識を集中させるとわずかにピリツとした痒みのはしった。

「それから、なんで本名を知っているか。ということですが・・・
そもそも臨也さんは私のこと、覚えてないんですか？」

覚えていなかった。

でも、『神奈』という名前に聞き覚えがあるのは確かだった。

神奈は少し寂しそうな顔をして呟いた。

「私、臨也さんのこと大好きだったんですけどね・・・」

あ。

この言葉を聞いて、臨也は全てを思い出した。

臨也が中学生のときのことだった。

その日はバレンタインデーだった。

臨也は眉目秀麗なこともあって、たくさんの女子からチョコをもらっていたが、一人だけとても印象に残った女子がいた。

「・・・臨也君。私の作ったチョコ、もらってくださいますか？」

そういつて神奈という少女はチョコを渡した。

臨也もなれたことなので「ありがとう」と軽くお礼を言ったのだが、その後に神奈が呟いた言葉が衝撃をあたえた。

「・・・臨也君、殺したいくらい、好き。大好き。大好き。・・・
でも殺したら意味ないかな・・・」

それは、とてもとても小さな呟きだった。

だから臨也も不審には思ったが『殺したいくらい』と聞こえたのは自分の空耳なのかなと思っていた。

が、

こうして現在、神奈という少女に殺されかけているということとは、あれは空耳ではなかったのだ。

臨也はまた携帯電話に文字を打ち込んだ。

『神奈ちゃんのことを思い出したよ。俺を殺したいくらい好きって言っていたことも・・・実際に俺を殺す気?』

携帯を覗きこんだ神奈が、嬉しそうな表情をする。

「思い出してくれたんですね・・・嬉しい・・・。あと臨也君、私にはあなたを殺す気はないですよ。その毒はせいぜい3日動けなくなるぐらいです。」

その言葉を聞き終わると同時に、臨也は意識を手放した。

神奈はピクリとも動かない臨也に近づいて、その耳元で囁いた。

「・・・私は臨也君のこと、殺したいくらいに好き。・・・でも殺しちゃったら意味がない。だから私、臨也君を痛めつけたい。死なない程度に。・・・今日は逃してあげるけど、また今度臨也君を捕まえに行くから。楽しみにしていてね」

翌日の朝、臨也と菜々と裕実は公園で倒れていた。

臨也は体が動かないところを運良く新羅に発見され、今は新羅のマンションで看病されている。

ちなみに菜々と裕実も新羅のマンションで看病されているのだが、2人は昨日のことを何も覚えていないそうだ。臨也にとっても都合が良い。

昨日のことを警察にでもばらされたら大変だった。

新羅が臨也がいる部屋に入ってきた。

「臨也ー。おかゆ持ってきたよ。セルティ特製の！」

「ありがとう。でもいらない」

スパツと断る。セルティの料理の味は臨也もよく知っている。

新羅はセルティの料理は上手い一度食べてみればわかるだのなんだのブーブー言っていたが、不意に神妙な面持ちになると臨也にこう言った。

「・・・で、臨也、その毒はだれにやられたの？いつもすばしっこくて用心深い君がやられるなんて珍しいね（笑）」

新羅が『珍しいね』のところできく鼻で笑ったのにイラツと来た。

臨也は事実を教えてくれる義理はないと思い、それきり新羅に背を向けた。

「臨也？臨也つてば。いじけちゃって子供みたい（笑）」

ぐああああゝっ、イラつく。

新羅、なんか俺が動けないことをいいことに好き勝手言っていないか？

その後もだんまりを決め込んでいると、新羅もあきらめて部屋から出て行った。

一人きりになった部屋で、臨也は静かに考える。
なんとしても神奈を潰さなければならぬ、と。

正直言って、臨也も焦っていた。

なぜ自分を殺さなかったのかは分からないが、近いうちに自分を殺しにくる可能性もある。

しかも、だいぶ神奈は手強そうだ。自分に気づかれないように毒針をさすあたりからして。

どうやったら潰せるか。どうしようか。

臨也はベッドの上でひたすら神奈を潰す方法を考え続けた。

4日後、臨也は無事退院(?)した。

そして神奈を潰す為にいろいろな作戦を開始したのだが、なかなか上手くいかない、というのは別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567y/>

月と少女と情報屋

2011年11月2日21時07分発行